巻頭インタビュー Interview

国立京都国際会館への期待と役割

―2017年「世界神経学会」京都開催決定

「第23回世界神経学会議」が2017年9月に京都で開催が決定され、主会場になる京都国際会館としては同会議を36年ぶりに2回目を担当することになり大きな期待が寄せられます。そこで誘致に尽力された国立精神・神経医療研究センター病院長であり、昨年末MICEアンバサダーにも就任された水澤英洋氏に、今回の招致におけるご苦労や当館への要望などをお聞きしました。

水澤 英洋氏

Hidehiro Mizusawa

国立精神・神経医療研究センター病院長
東京医科歯科大学客員／特任教授
（一社）日本神経学会代表理事
観光庁MICEアンバサダー

1976年、東大医学部卒。同大学神経内科に入局、助手を経て1984年筑波大学神経内科講師。1986-1988年Fulbright奨学生として米国Albert Einstein医科大学に留学、帰国後、助教授を経て1996年東京医科歯科大学神経内科教授、1999年同大学大学院脳神経機能病態学（のち脳神経病態学）教授、2008年、同大学研究担当副理事、脳統合機能研究センター長、医学部附属病院副院長、2014年4月から国立精神・神経医療研究センター病院長。2010年5月より日本神経学会の代表理事。

誘致側の招致機運をまず上げる

木下博夫館長（以下、木下）　昨年9月、ウィーンにて2017年開催の「第23回世界神経学会議」が香港、ソウルの候補地を抑えて京都に決定され、当館での開催となりました。1年以上のロビー活動、投票前日のPR、プレゼンテーションなど数多くの誘致成功要因が挙げられると思いますが、改めて決定の要因についてお聞かせいただけますか。

水澤英洋氏（以下、水澤）　私自身が誘致で心掛けたのは、昨年5月頃に日本神経学会の学術大会があり、世界神経学会議を日本に誘致する我々主催者側がまず関係者内での盛り上がりが大切だと考え、学術大会でポスターを数多く会場に貼り、国際学会の招致運動をしていること、この国際会議が学会や日本にとっても重要であることを周知する努力をしました。東京オリンピック同様、まず誘致側が盛り上がり、誘致への機運を上げることに重点をおいたのです。
世界神経学会の開催地決定の方法は、総会の場で114カ国の構成員の代表が投票して決定されます。各国の代表一人ひとりに対する招致運動が重要であり、メール、手紙はもちろん、他の国際学会等にも出向き、直接お会いできるチャンスを最大限活かして資料等を手渡しながら日本開催の意義や京都の素晴らしさをPRしました。さらにキーパーソンとなる影響力の大きい方々には、実際に日本の学会へ招待し、我々のアクティビティの高さなどを直接見ていただいたことも高い評価に繋がったと思います。

IT化による最先端技術を体得できる学会に

木下　去年8月に在オーストリア日本大使就任直後の竹歳誠氏を京都に招き、大使就任初の仕事として世界神経学会の日本誘致を成功させようと激励、要請しました。絶妙のタイミングだったと思います。

水澤　オーストリアでの最終誘致活動は重要なファクターでした。投票前夜に開催した「ジャパンナイト」では竹歳大使からも素晴らしいスピーチをいただき、日本政府も誘致をサポートしていることを各国に伝えるには大変効果があったと思います。

木下　JNTO（日本政府観光局）の担当者から、当日は水澤先生も日本の良さを強力にアピールし、京都のハンディキャップをプラスに転じる話など、迫力あるスピーチをされたと聞いております。この成果を結実させるためにも今後の準備期間が大変重要と考えています。先生は昨年12月、MICE戦略において8名のアンバサダーのお一人にも就任されましたが、充実した学会に向けて当館が解決すべき課題についてはいかがでしょうか。

水澤　昨年のウィーンの実績から7,000名を超える参加者が想定されますが、まず最先端技術が実感できる学会の実現です。IT化により先進技術を駆使した画像や情報、トランスファーなどがスムーズに行われること、そして開催理由の一つにもなった日本の正確さや信頼性を活かして展開されることを期待しています。
また会場側は単なる場所の提供に留まるのではなく、スタッフの語学レベルも高めていただき、より高いおもてなしの精神で対応いただくことも重要ですね。交通のインフラ整備においては、日本中で利用できるSuicaなどの電子マネーシステムを活用できると大変便利だと思います。

世界神経学会の誘致活動（2013.9.ウィーンにて）

二度目の開催会場として際立つ進化に期待

木下　当館は1966年に開館し、施設の耐震補強等含めて今、改築中ですが、建物の補修とともに「人材」のスキルアップにも取り組む必要があると思っています。また京都は旅行者が多数入洛した際、学会を誘致しても宿泊施設が十分ご提供できない問題もあります。このあたりをどう解決していくかも智恵を要するところですが、アンバサダーのお立場としても今後、期待される点、ご意見等いかがでしょうか。

水澤　MICEの観点では私は学会関係の誘致が関心事ですが、学会の参加者は直接的な経済面の波及効果は大きくはなくても社会的発信力を持っています。日本の産業、観光そして本来の学術を体験し、それを帰国先で、また他の学会の招致に対しても影響力を発揮します。例えば日本の素晴らしさや“平和”への理解を深めていただくことは、「日本の安全保障」にも役立つのではないでしょうか。
宿泊施設については、一昨年のサイトビジットでも関係者より指摘を受けました。京都には4つ星、5つ星ホテルが多くない評価ですが、リーズナブルなホテルから高級志向のホテルまで、幅広い対応は国際都市として求められる要件の一つと考えますので、現在建設中のホテルも含めて2017年までに期待はしております。

木下　現在ラグジュアリークラスのホテルが1つ完成し、さらにハイクラス対応のホテルも予定されています。手頃な宿泊施設も増やしつつ、より多くの方々のリクエストにも応じられるよう取り組んでいきます。
また京都ならではの歌舞伎、能や狂言などの古典芸能、華道、茶道あるいは坐禅体験など文化的な要素も華美にならない程度に、学会を応援する基盤も作りたいと考えております。

水澤　日本での世界神経学会の第1回目も京都国際会館での開催でした。当時、私もモダンなデザインに驚いた記憶があります。同じ場で同じ学会をするということはダイレクトに比較もされます。建物は同じでも、中身は「伝統」と「ハイテク」が融合した、国際的な対応であり、参加者に学術内容と共にそんな驚きの経験をしていただければ素晴らしいのではないでしょうか。

木下　重要な指摘をいただきました。世界神経学会において前回との違いが際立つ会議運営が行われるよう気合を入れ、2017年に向けて一つずつ課題に取り組んでいきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

インタビュアー●木下博夫
1943年生まれ。国土事務次官、阪神高速道路（株）社長などを経て2012年より国立京都国際会館館長・常任理事を務める。